

# 戒律のはなし（一）

時代と学問

佐々木 閑

子供のころは、科学者になるのが夢でした。これは男の子としては普通のこと。女の子なら美容師さんかスチュワーデス、男の子はパイロットか科学者というのが、普通の子の理想でした。ニュートンやアイントンの伝記を読んでは、「天才ってすごいなー。誰も考えつかないようなことを一人の力でやってしまう、なにか超人的な力があるんだろうなー」と思い焦がれていたのです。その後まあ、いろいろ、いろいろ

ろとまがり道、くねり道があつて、気がつけば畠違いの仏教学者になつて、いるわけですが、それでも科学に対する憧れは今も変わることはありません。アインシュタインという名前を聞くだけで、今も背筋がぞくぞくしますし、ガウスなんて、思い浮かべただけで、ははーっとひれ伏してしまいます。ただ、しかし、こういった学問に対する思いが、子供のころとは幾分違つてきてもらいます。小さいころに、偉人

伝や教科書で知った天才たちの姿というものは、時代を超越して一人屹立する孤高の人、といったイメージだったのですが、その後、歴史というものを本格的に勉強して、それぞれの天才が生まれ育った時代の社会環境や世界観といったものを知るようになると、そういう人たちが決して個人の独力だけで偉業を成し遂げたわけではなく、時代の必然的な流れとしてそれぞれの仕事に向かっていったということが分かつてきました。大勢の人たちが時代の流れに沿つて同じ方向へと進んでいる中で、先頭に立つて皆をリードする、ひとわざぐれた能力を持つ者が、天才と呼ばれるのです。もしニュートンの時代にニュートンが生まれていなくても、必ずそれに代わる人が同様の仕事を成し遂げたでしょう

うし、アインシュタインがいなければ別の人も相対性理論を考えていたはずです。このように科学の発見が時代に依存するものだとすれば、その科学が定める法則といふものも、決して絶対の真理ではなく、その時代特有の特殊な世界観の現われといふことになります。こんなことは学校の教科書では教えてくれません。私たちは教科書に載つて いる法則や定理を、絶対正しいものとして丸暗記したのですが、それは大人の方便。本当に学ぶべき事は、「歴史性を根底とした科学」、つまり、「真理は相対的なものだ」という事実であつたと、大人になつてから気がつきました。

科学さえもが、時代に影響されるひとつの人間活動だということが分かつてくると、仏教を学ぶことがいかに面白いこと

か、再認識できるようになりました。私がまだ小さいころ、私の大祖父で長井眞琴という学者さんが家においてになりました。そのころは東大の教授でした。父親に「あのおじさんは何をしている人か」と尋ねると、父は大仰に「あの長井先生は、パーリ語という古い言葉の専門家で、仏教の戒律を勉強している偉い学者さんである」と教えてくれたのですが、それを聞いた私は「なんてつまらない仕事だろう。どうせ学者になるのなら科学者になつて新発見でもすればいいのに。もうなくなつてしまつた昔のことをほじくつて何が面白いんだろうか」と思つたものです。私は現在、パーリ語の専門家で、仏教の戒律を研究する学者になつてゐるのですが、今になつて、自分の思い違ひの訳がよく分かります。科学は絶

対の真理を追究する崇高な学問で、仏教学だの歴史学だのは、過ぎてしまつた過去のことを行うじうじとつつきまわすだけの無意味な趣味、というのが、私、幼少のみぎりの思いであつたわけですが、その科学にも厳然として歴史的背景があるということを知るに至り、仏教も科学も、数学も哲学も、経済学も文学も、およそ学問と呼ばれるものはすべて、歴史性を基盤とした人間活動の一環として扱うべきものだと思ひ至つたのです。このように考えると、俄然、仏教を学ぶことに誇りが生まれてきます。科学も仏教も、その時代時代の最高の叡智が、宇宙の真理を解明するために懸命の努力をした、その痕跡であると考えるなら、同じレベルの気高き人間活動と考えることができます。仏教を歴史的に解明し、

その意味を理解するということは、物理学の歴史を辿つてその最先端に立ち、宇宙法則を発見していく科学者の作業と、本質的に変わるものではないのです。

小さいときの夢はかなわず、數学者でも物理学者でもなく、一見なんの面白みもない戒律学者になりましたが、仏教という智慧深き世界に触れることで、自分の身の上のありがたさを深く感じることができました。「長井先生、その節は、ご無礼なことを考えました。仏教の戒律って、ほんとに面白い世界ですね」。そして、この面白さを独り占めにしておくのはあんまりもったいないと思うのですから、つい他の人にも教えてあげたくなる。それが教育というものの意味なんでしょうね。ですから私は、毎日自分の好きな面白いことをやつて、し

かもそれをまわりの人たちに教えてあげて、そのうえ「先生」なんて呼んでもらえる、恵まれた人間なのです。

『禪文化』にエッセイを連載しろといわれて、第一回目なので、自分自身のことを書きました。文才のない作家は、自分の身の回りのことをちょこちょこ小説にして場つなぎするそうで、まあ、そんなところです。次回からは、もうすこし硬派でいきます。

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（二）

寺は誰のものか

佐々木 閑

ご存じのように、お釈迦様が悟りを開かれたのは菩提樹の下でした。今でもインドのブッダガヤにはその菩提樹（代替わりはしているようですが）が残っていて、世界中の巡礼が拝みにやってきます。樹の下に座つて瞑想するという修行方法は、

がきらきらと踊る中、巨木の根方で結跏趺坐して目を閉じれば、精神はたちまちにしてこの世界から遊離して、遙かな高みへと昇つていくようです。大樹の下での瞑想こそが、深遠なインド精神文化の発祥地なのです。

仏教だけでなく、その他のインドの宗教家たちの間でも広く行われていた、ごく普通のものでした。大地が焼け付くようなインドの昼下がり、木の葉ごしの陽光

シンボルとして、あらゆる仏教国で崇拜されているのです。

お釈迦様は、自分が悟りを開いた後、その体験を他の人たちにも教えて、共に悟りの喜びを分かち合いたいと考えて、布教の旅に出発しました。最初の布教の相手は、ベナレスの近く鹿野苑にいた五人の修行者たちでした。いわゆる初転法輪です。その後も多くの人たちが次々と弟子になり、仏教僧団は急速に拡大していきます。

しかし、このような発展期においても、仏教修行者の住みかは、相変わらず木の下でした。当時の僧団の様子を覗いてみたなら、森の中に点在する大きな木の下で、三々五々、瞑想に専念する比丘

たちの姿が見えたことでしょう。そしてそこには、寺院というものはみあたりません。お釈迦様が布教を始めたばかりのこの頃、修行者が住まうための住居、つまり寺院というものはまだ存在しなかつたのです。

仏教の原則は、一切の生産活動を停止して、すべてのエネルギーを修行に注ぐという点にありますから、日々の生活物資はすべて一般社会からの布施によってまかなうことになります。その生活物資の中でも、最も高価でぜいたくなのは、不動産つまり、土地と、その上に建つ寺の建物です。生産活動をしない修行者たちが、自分の力で寺の敷地を手に入れ、そこに寺院を建立することなどできるはずがありません。それはすべて、一般社会の信者さんからの寄

---

進に頼っていたのです。

題です。

律の記録によりますと、お釈迦様が初めて信者さんから受け取った寺院は、竹林精舎という名の僧院でした。有名な場所ですね。寄進したのはマガダ国ビンビ

サーラ王です。王様だからこそ、広大な土地と、立派な建物を易々と寄進することができたのです。

この竹林精舎を嚆矢として、それからの仏教僧団は数多くの僧院を所有することになります。一番有名なのは祇樹給孤独園、略して祇園ですね。これらの僧院はすべて、信者さんからの寄進です。つまり、信者さんが自分で建てて、それをそのまま、仏教僧団に寄付するという形で、所有権を僧団に移譲するわけです。さてそれでは問

題です。

「お坊さんたちが、もらったお寺で暮らしているうちに、あちこち傷んできて、修理が必要になりました。その修理の費用は一体どうやつて工面したらよいでしょうか」。

普通に考えるなら、その僧院はすでに信者さんから僧団に譲り渡されたものですから、所有権は僧団側にあります。したがって、その修理は僧団の責任ということになるでしょう。「お寺を寄進した信者さんに、その後の修理の責任まで負わすのは可哀想、修理はまた別の人たちにお願いしよう」というわけです。ところが、寺院の所有権に関する律の規則を見るところ、違つことが書いてあります。それは次

ある村の長者さんが、ラーフラ尊者のためにお寺を建てて寄進した。ラーフラ

のであつた。つまりこの寺はラーフラさんのものなのです。

さんはそこにしばらく住んでいたが、まもなく遊行の旅にててしまい、その寺は無住になつてしまつた。長者は「ラーフラ尊者がまた帰つてくるかどうかわからないし、それならこの寺を僧団(サンガ)に寄付しよう」と考え、寺を僧団に寄進しなお

した。ところがそれから間もなく、ラーフラさんが戻つてきた。自分の寺が、今では僧団の所有となつていて驚いて、お釈迦様(つまりラーフラさんのお父さん)に相談したところ、お釈迦様の判決は「施主が、特定の人を指定して布施したものと施主の側にあって、坊さんたちは、ただそれを借りて住んでいるだけなのです。つまり借家ですね。ですからそれが傷んだら、本当の所有者である施主が、自費

した。ところがそれから間もなく、ラーフラさんが戻つてきた。自分の寺が、今では僧団の所有となつていて驚いて、お釈迦様(つまりラーフラさんのお父さん)に相談したところ、お釈迦様の判決は「施主が、特定の人を指定して布施したものと施主の側にあって、坊さんたちは、ただそれを借りて住んでいるだけなのです。つまり借家ですね。ですからそれが傷

以上が律の中の話です。これはどういうことかというと、施主が自分で寺を建てて、特定のお坊さんなり、僧団なりへ寄進した場合でも、その本当の所有権はずつと施主の側にあって、坊さんたちは、ただそれを借りて住んでいるだけなのです。つまり借家ですね。ですからそれが傷

で修理しなければならないということなのです。坊さんたちはただ借りて住んでいるだけですから、自分で直す必要はありませんが、そのかわり、寺院の真の所有者になることはできません。そして、家賃を払わねばなりません。その家賃とはなにかといふと、もちろんお金を払うのではなくて、坊さんとしての清らかで高潔な生活を日々送ることなのです。布施の果報といふのは、つまらない人に布施するよりも立派な人にあげた方が大きくなると考へられているので、自分の布施したお寺に立派なお坊さんが住んでくれれば、それだけ大きな果報が得られることになります。

ですから、そこに住む坊さんが清らかな生活を送っていると「ああ、よかつた」と施

主は安心します。これが家賃です。つまりお坊さんが寺院に住むためには、それにみあつた立派な人でなければならぬといふことなのです。

このように、樹の下から出発した仏教も、信者さんとの共存の中で、寺院生活を始めるようになり、それが現在の仏教世界にまで続いてきています。ちゃんと家庭生活を日々送ることなのです。布施の賃を払っているお坊さんもいれば、そうでない人もいるでしょう。払っていないお坊さんには督促状が必要かもしれませんね。

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（三）

比丘たちのひそかな悩み

佐々木 閑

お経と律、どちらもお釈迦様の言葉を伝え残す聖典として、古来、仏教徒たちによつて尊重されてきました。しかし、この二種類の聖典は、性格が本質的に違つています。お経は、我々人間が悟りを得るためにどうしたらよいのか、という問題に対

するお釈迦様の答えを集めたもの、一方の律は、お坊さんが僧團で正しく生活するために守らねばならない規則を集めたもので、ですからお経は、どちらかといえば高尚で哲学的で、美しくてかつこ良く書かれています。それを読んだ人が、「ああ、仏教って素晴らしい。私も仏教の修行者となつて、悟りを追求してみたい」と思わせるような口調で書かれているのです。

それに対して律は、お坊さんが実際の日常生活で使う法律なのですから、きれいごとでは済みません。出家修行者とはい生身の人間。そんな坊さんたちが、何十人、何百人と集まつて集団生活をするのですか

ら、汚いところや生臭いところが、いたるところに顔を出します。そういう現実のどろどろした問題を解決し、僧団生活をできるだけスマートに運営していく

というのが律の目的です。ですから律は、初めから、坊さん達の隠れた陰の面に焦点を合わせて書かれています。坊さんたちの衣食住、いやもつとはつきり言うなら、性欲、食欲、名譽欲、金銭欲に権力欲と、およそ坊さんには似つかわしくない様々な欲望が赤裸々に描かれているのです。

もちろん、律の目的は、そういういた欲望を抑えて清浄な修行者として生きるにはどうしたらよいか、という問い合わせるこどですから、本来非常に真面目なものなのです。知らずに読むと、まるで仏教には欲望に目のくらんだ人ばかりいるかのよ

うに思われて、誤解されてしまいます。古来、律が秘密の書とされて、一般人の目に触れぬよう秘匿されてきた理由も、そこにあります。

今でこそ、こうやつて『禅文化』のコラムで香気に紹介できるほど気安く扱えるようになりましたが、世が世なら私など、「律藏秘密漏洩罪」で僧団から処罰されるほど、その取り扱いは厳しく制限されていたのです。そういう姿勢で書かれているものですから、律藏には、一般人が思いもしないような、坊さんたちの悩みや苦労が描かれています。今回はそういう問題の中、当時の坊さんたちを苦しめていた、ある病気についてご紹介しましょう。それは痔です。

お釈迦様時代、すでにインドでは医術というものが生まれていました。それはイング語でアーユルヴェーダと呼ばれています。最近では漢方と並ぶ東洋医学の代表として有名になりましたね。その起源はお釈迦様がおられた、紀元前の時代に遡ります。古い文献を見ると、当時のインド医術のレベルはかなりのものだったようですね。治療のメインは漢方と同じく薬物療法ですが、その他に外科手術もさかんに行われていたようで、脳の切開手術の記録さえ残っています。

さて、そんな時代、人々を悩ませいろいろな病気の中でも、特にたちの悪いもののひとつが痔でした。今も昔も、痔という病気は、本人のつらさが周りに伝わらないという点で、一種独特の悲惨さを含んでいます。ある資料によると、有名なマガダ国

のビンビサーラ王が痔になつて悩んでいたところ、出血を見た后たちが「まあ、王様、月のものでござりますか。王様も女におなりあそばして。もうすぐご懷妊あそばすのではございませんか」とはやし立てたということです。

出家生活を送る坊さんたちにとつても痔は大敵でした。とにかく座る機会の多い修行者が痔になるというのは、ほんとうにつらいことなのでしょう、律の中でもいたるところに、そのつらさが記されていました。当時の痔の治療としては、ナイフで患部を切り取る手術もあつたようですが、お釈迦様はそれを禁じています。理由ははつきりしないのですが、陰部に刃をあてるという、過激な方法をお避けになつたのでは

ないかと思ひます。ではどうやつて痔を治すのでしょうか。それについては次のように記録があります。

ある比丘が痔を病んでいましたが、外に出てきた患部を爪でねじ切つたところ、あまりの痛みにがまんできず、呻き苦しんでいました。その時お釈迦様が、大悲の力に引かれてその比丘のところへおいでになつて尋ねられました。「比丘よ、お前は何を苦しんでいるのか」。そこで比丘は合掌してお釈迦様を仰ぎ見て、苦しさに涙を流し、泣きながら病状を詳しく申し上げました。お釈迦様はおつしやいました。「私は先に、お前たち痔を患つた者が患部を切り取つてはならないと言わなかつたか」「はい、おつしやいました」「ならばなぜお前

はこのようなことをしたのか」。「世尊よ、あんまり苦しかったからです」。「苦しさの余りやつたことであるからお前に罪はない。今、お前たちに命じる。病気が苦しいからといって、爪などでその痔を切り取つてはならない。痔を治す方法は二つある。薬を使うか、呪文によるものである。今後、痔を自分で切つたり、他人に切らせたりしてはならない。これに違反する者は罪となる」。

つまり痔は薬か呪文で治せ、とおつしやつてゐるのです。そしてお釈迦様は弟子たちに、その痔を治すために呪文を教えてくださいました。しかもその呪文を唱えると、痔が治るだけでなく、宿命智という神通力も得られるそうです。その呪文の最後は、次のような言葉で終わります。

「北方大雪山王の場所に薜地多樹という大樹がある。それには三つの花が咲いていい。一は相続、二は柔軟、三には乾枯といふ。その枯花が乾燥すると墜ちるようになり、私の痔病もまた、それが風痔、熱痔、瘻痔、血痔、糞痔、あるいはその他の諸痔のどれであっても、皆墜ちて干からびよ。出血も膿も苦痛も消え失せよ。すぐに干からびよ」。

これを聞いて仏弟子たちは歓喜して承つたということです。

袈裟だと思いませんか。しかし、悟りの道を聞いて歓喜するのが仏弟子ならば、痔の治療法を聞いて小躍りするのもまた、仏弟子です。痔の苦しみはよほどのことだつたんですね。ここには、日々、日常を生身の

人間として生きながら、悟りという絶対的な非日常を目指す、仏道修行者たちのありのままの様子が映し出されているように思います。文字通り、上から下まで、人間一人、まるごと包み込む仏教の修行生活といふものを再度確認してみるのも重要かもしれません。

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（四）

お風呂の話

佐々木 閑

日本にはいろいろな種類の仏教があつて、その教えや修行方法は、宗派によつてみな異なつていて。禅宗といえば、修行の中心はいうまでもなく瞑想つまり坐禪ということになるのですが、別の宗派では、たとえば護摩をたいて呪文を唱えたり、毎朝、野山を走り回つたり、念佛を唱えたり、あるいは、特別な修行などしてはならないという極端な他力を主張する宗派もあります。日本の仏教を外から見たら、まるで修行の博覧会、「一体ほんとうの仏道修行はどれなんだ」と困惑してしまいますね。しかしこれは、何千年

にもわたる長い歴史の中で、いろいろな原因によつて仏教が枝分かれし、変質してきた結果なのです。どのが本当の仏道修行か、と聞かれても、どれもが仏教という大きな宗教運動の一支部である以上は、「これは仏道修行ではありません」といつて特定のものだけを捨ててしまふわけにはいきません。もしそんなことをしたら、結局はあらゆる宗派の修行を捨てなければならなくなるでしょう。とはいっても、もともとはお釈迦様という一個人から出発した宗教ですから、お釈迦様の時代からずっと続いてきた修行と、後

の時代になつて新しく導入された修行というものを区別することは可能です。こういう時に、仏教学という学問が役に立つわけです。

古い時代の資料を見ると、お坊さんたちは、大きく分けて二種類の修行をしていましたことが分かります。ひとつは瞑想。もうひとつはお経の勉強です。つまり坐禅をして精神を集中させ、お経を学ぶことで智慧を磨いたわけです。今でもスリランカなどの上座仏教では、このかたちを守っています。黄色い衣を着たスリランカのお坊さんが、野山を走り回つたり護摩をいたりすることはできません。そしてこの形は、日本の宗派でいうなら、まさに禅宗の修行そのものですね。こういうと、禅宗の皆さん方は嬉しそうな顔をなさるのですが、でもお釈迦様時代のお坊さんは、律にもとづいた僧団生活をおくりながら、そういう修行をしていましたですから、今の禅宗と全く同じ

というわけでもありません。とにかく、お釈迦様時代のお坊さんたちの修行スタイルは非常にシンプルで、かつ合理的だったのです。

よく、年末や元旦に、冷たい冷たい滝の水にうたれで修行している仏教者の様子がテレビに映りますが、ああいつた修行も、本来の仏教にはありませんでした。自分の心を清らかにするのに、水を浴びたって何の効果もありはしませんからね。心を清浄にするためには、自分の力で心の中の悪い要素、つまり煩悩をひとつずつ消していくしか道はないのです。ですから仏教では、沐浴することになんの神秘的な力も認めています。水を浴びるのは、ただ身体の汚れを落とすことだけが目的です。だから毎日水を浴びたりはしません。何日かに一度、身体が汚れた時にだけ水浴びするのです。

ところで、お釈迦様の時代、お坊さんは水浴びの他に、サウナにも入っていました。これはちょっと意外でしょ。水浴びは身体を清潔に保つのが目的ですが、サウナの目的は、修行で疲労した身体をリラックスさせて、健康な僧団生活を続けていくことにあります。その詳しい作り方、使い方は、みな律の中に書かれています。サウナといつても、今みたいに、木造りのしやれた小部屋を想像してはいけません。かま風呂と言った方がいいでしょうね。土をこねて、室を造り、その中にカマドを設けます。そこで火をたくと、その熱気が室の中に籠もります。もちろんカマドからはもうもうと煙がでてきますから、煙を抜くための煙突あるいは煙抜きの窓がつけられていきました。

充分に室が熱くなつたら、小さな入り口から身をかがめて中に入ります。中の熱気はかなり強くて皮膚が焼け付くので、顔には熱を防ぐための泥を塗り、身體には水を掛けておきます。そこでじつとしている

と、たちまち体中から滝のように汗が流れ始めます。一杯汗をかい、身体が軽くなつたら室から出て、外で冷たい水を浴び、泥と汗を流します。気分はまさにサウナですね。このあと私なら冷たいビールでも飲んで、「生きててよかつたー」と叫ぶところですが、律を守るお坊さんのことですから、きっと水かジュースを飲んで「出家してよかつたー」と叫ぶんでしょうね。

私は先年、ラオスへ行つたのですが、首都ビエンチャンのお寺で、サウナに入る機会がありました。律に書いてあるものより随分すんでいて、ちゃんと立派な木造の部屋（といつても二、三人入れば一杯になる小さなものです）があつて、下の薬草釜から立ち上る芳しいハーブの蒸気が、もうもうと身体を包み、部屋に入つて十秒もすると、たちまちドツと汗が噴き出します。一、三分入つて外に出て、外気で身体

を冷やしてまた入る、ということを何度も繰り返すうちに、なんだか身体の毒気がどんどん抜けていくような爽やかな気分になり、すっかり別人になつたようでした。スタイルに違いはあっても、当時のお坊さんたちも、サウナに入れば、私と同じように、爽やかな気持ちになつて、「さあ、また修行に励むか」といって、やる気をだしたのでしょうか。

このように、サウナと仏教僧団は、古代インドの時代から深く結びついていました。そして仏教が周辺の国々へ広まるにつれて、サウナの設備も、それらの国へと伝わつていったのです。ただし、インドで造られたお椀を伏せたような形の仏塔が、日本へ来ると五重の塔に変化するように、本来かま風呂であった僧団のお風呂も、日本にまで伝わつてくると、かなり違つたものになりました。どういうものになつたのか、詳しく知りたい方は、妙心寺境内の明智風呂をご覧になればよく分かります。外で沸かした熱いお湯

を、樋を通して、湯殿に流し込むというスタイルですね。サウナ兼湯浴み場といったところでしょうか。日本でお寺の中にお風呂が造られた一番古い例は東大寺です。このお風呂は今では使われていませんが、巨大な鉄の湯船でお湯を煮立て、そのお湯で部屋を暖めると同時に身体を洗うという、インドのサウナとはかなり違つたかたちになっています。そして、その浴室の入り口は、きれいな唐破風になつています。これこそが、日本中のお風呂屋さん、つまり銭湯の入り口が唐破風造りになつた理由です。遠く二千五百年前のインドで生まれたサウナの習慣が、日本中のお風呂屋さんの建築様式に影響を与えているというお話をしました。

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（五）

寺院カジノについて考える

佐々木 閑

最近マカオがとてつもないカジノ地帯に変身しつつあるようで、経済界でも大きな話題になっています。もともと博打で有名な場所でしたが、経済成長を続ける中国のバブルマネーが一挙に集中し、かつてない多量のお金が行き場所もなくうんういなっているということです。お金というのは、使つてこそ意味のあるもので、ただ置いておくだけなら、なんの意味もありません。同じ置き物にするなら招き猫の方がかわいいだけましです。そういう、使い道のないお金がどつさり余ってしまったたらどうしますよう。どうやつたら、そのお金に有効な仕事をさせることができるでしょうか。答えは、先年の日本のバブル経済が教えてくれます。余つていて使いみちのないお金は、どんどん人に貸して、その人の事業資金として利用してもらいます。そしてその事業でもうかつた分のいくらかを利子や配当として受け取ります。つまり資本家になるわけ

ですね。バブルの時は、お金の余りかたが異常だったため、一個人に何千億円も貸し付けるようなとんでもない事態になり、借りた方の事業が行き詰った時点で、経済が大崩壊しました。今、中国では、その余ったお金がマカオに集まっているわけです。

ともかく、余った金を人に貸して利息で儲けるというやり方は、いつの時代だって普通に行なわれていた経済行為です。闇金融、高利貸しなどという悪辣なイメージですが、銀行だって郵便局だって、利息が幾分安いというだけで、業務内容は同じです。ですから、利息で儲けるという行為をなにか品のない商売法だと考えるのは全くの偏見です。というわけで、もうおわかりですね。今回は、金貸しをするお坊さんの話です。

熱心な信者さんが、お坊さんたちのためには寺院を建ててあげたのですが、やがてそ

の立派なお寺にもガタがきて、修理が必要となりました。そこで信者さんたちはお金をだしあつて建設基金をつくり、「これで修理してください」といってお坊さんたちに渡しました。ところがお坊さんたちは、その基金をどうやって運営したらよいかわからず、寺の倉庫に入れっぱなしにしておいたため、いつまでたっても修理は進みませんでした。これを知つて呆れた信者さんたちがお釈迦様に相談したところ、お釈迦様は、その基金を人に貸して利息で利益を出し、それで寺を修理するよう定められたのです。お釈迦様は、貸し出しの手続きまで決めてくださいました。「お金を貸す時には、その金額の二倍の担保を入れさせ、契約書をつくつて保管せよ。保証書には年月日、寺院側の貸し出し責任者の名前、借り手の名前を明記せよ。たとえ相手が熱心な仏教信者

(優婆塞)であつても、担保は必ず取れ」といふものです。この話は、ある特定の律にだけ現われるものなので、ほんとうにお釈迦様がおっしゃったわけではないでしょうが、ともかく当時のお坊さんたちが、このような規律に基づいて金融で利益を得ていたことは確かです(『根本説一切有部毘奈耶』巻二十二、大正大藏經二十三卷、七四一c～七四三c)。

さてここで考えてみましょう。お坊さんが、貸した金の利息で生活することは許される事なのでしょうか。今、アメリカに大変有名な律の専門家がいるのですが、その先生は、この話を取り上げて「このことからのは、表向きの建前とはうらはらに、世俗にどつぶりつかつた生活をしていたのだ」と言っています。私はこの先生と大の仲良しで、お酒を飲みながら一緒に律の話をするのが楽しみなのですが、こういう点ではいつも反対します。問題はそんな単純なことではないのです。私は、お坊さんが金貸しをしても全く問題ないと考えています。仏教の基本は修行です。できるだけ多くの時間を修行に使いたい。それが仏道修行者の基本姿勢です。全エネルギーを修行に注ぎ込むためには、日常の仕事などしている余裕はありません。だから俗世を捨てて出家するのです。でも、仕事をやめてしまったらご飯を食べることができない。そこで、人々の家をまわって余り物を分けてもらうのです。つまり乞食(托鉢)ですね。仕事にエネルギーを奪われることなく、修行に専念できる環境をつくることができれば、それこそお坊さんにとっては理想の生活なのです。ただし、そこにはある条件がつきます。一般社会からの布施で命をつないでいる以上、

社会の人たちから贅<sup>ひん</sup>躉<sup>じゆく</sup>をかうような行為は決して許されないので。社会常識を逸脱しない範囲で、最も効率よく生きていく、これこそがお坊さんにとっての最良の生活方法なのです。

ですから、信者さんたちからもらつたお金を基金として人に貸し付け、その利息をもらうという、大変効率のよい生き方は、「まわりの社会がそれを嫌悪しない限りにおいては」正当です。先のお話では、利息分は寺の修理費として使うことになっていました。これも大事な点です。儲けたお金を、坊さんが自分の贅沢に使つたとしたら、おそらく信者さんたちは怒つてしまふでしょう。寺院修理という、公共の目的に使うからこそ、このような金融活動も許されたのです。「今の日本の寺院が金融業で利益を得ることはあるか」と問われたなら、私は

「うーん」と唸つてします。その儲けがすべて、お坊さんの修行という、最も重要な活動のために使われるのならもちろんオーケーです(だから妙心僧堂が金融で生計を立てたとしても構わないのです)。しかし日本の場合、ほとんどの寺院は家族経営になつていて、修行以外にも奥さんの着物や子供の学費にもまわります。「金融で儲けて、それで家族を養うのなら、普通の金融業者ではないか」という批判が起こりそうです。寺の在り方は、その時代の社会の通念に連動するのです。

昔は寺で博打をすることが当たり前でした。あがりの一部は「テラ銭」といつて、寺院の収入になりました。それでなにも批判が起こらなかつたのですから、当時の社会通念では、「博打に場所を提供した利益で寺院経営を行なうことは、おかしなことではな

い」と皆が考えていたことになります。やはりそれも、儲けたお金が、寺の維持という公共の目的に使われていたからなのでしょう。今は、その「テラ銭」が「拝観料」になつています。考えてみれば、本来誰にでも門を開いていた佛教寺院が、お金を取つて人を入れるなど、仏教の主義に背く行為です。しかし文化保存の意識が高まつた現代では、「貴重な文化を保存する」という公共の目的のためなら、入る人からお金をとることも結構なことである」と社会が認めているので、このような制度が成り立つわけです。

今回は表題に「寺院カジノ」という、ちょっとと奇妙な言葉を入れました。しかし、もともと「テラ銭」をとつていた時代、寺院はカジノだったのです。今我々が寺院カジノと聞いて、怪しげな、聞いてはならぬ言葉を聞いたような気になるのは、現代の通念

として、寺と博打がどうしても結びつかないからなのです。きっと今の時代は、博打といふものに対する人々の許容性が昔より厳しくなつているんでしようね。ですからもしかして、現代において寺院カジノなど生まれるはずはありません。ただ今回言いたかったのは、寺院の有り様は時代によつて様々に変化していくが、その是非を考える場合、必ず「修行する」という基本原則に立ち返つて判断しなければならないということです。「あなたが変われば世界が変わる」は花園大学のキャッチフレーズですが、こちらは「社会が変わればお寺も変わる」というところでしよう。お金の話になつたらいつの間にか予定の枚数を超過してしまいました。お金の魔力は恐ろしい。皆さんもお気をつけください。

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（六）

ゆとり修行

佐々木 閑

「国家の歴史」などというと随分深遠な趣  
があつて、凡人には理解しがたいた専門家の領  
域のように思えるのですが、国家だつて所詮  
は一人一人の人間によつて作られているの  
ですから、人間と同じように個性といつもの  
があります。その個性をうまく把握してやれ  
ば、一国の歴史をあたかも一人の人間の人生  
遍歴のように分かりやすく表現することも  
できそうです。明治以来の日本を、一人の男  
性にたとえてみましよう。江戸期の日本は、  
外の世界には全く氣を配ることなく、晴耕雨  
讀でのんびりひとり暮らしをしている男の  
子でした。勤勉で勉強好きで、しかも悪気の  
ない純朴な人柄でしたが、なにしろ外の世界  
をなにも知らないといつ点では、家から一步  
も出たことのない、世間知らずのぼんぼんで  
もありました。それが明治になつて、ずるい  
人や愚かな人など、いろんな種類の人たちが  
暮らす世間の荒海に突然放りだされること  
になり、「これからは自分の力で世間を渡つ

ていけ」と言われたのです。

そこでその男の子（以下、日出男と呼びます）は、まず世間の様子を知るために、一所懸命勉強します。そしてその結果、怖い世界で生きいくには、誰とけんかしても負けないように力一杯に努力して体力をつけ、どんなに商売しても損をしないように、智慧を磨かなければならぬといふことに気付きます（富国強兵）。その地道な努力のお陰で、日出男はやがて世間でも知られるようになり、自信もついてきました。しかし自信がつくと同時に、それまでの謙虚さも薄れがちになり、時にはまわりの人たちに對して傲慢な気持ちを持つようになります。そうなると、自分より先に社会になつて立派な暮らしをしている先輩たちが羨ましく、時には妬ましくさえ思えて、なんとかその先輩たちに並びたい、追

い越したいと思うようになります。そんな気持ちが相手にも伝わって、先輩の中には、日出男を生意氣だと嫌う人もでできます。そしてとうとう、先輩の中でも特に気が短くて乱暴者の熊夫とけんかになります（日露戦争）。まわりの先輩たちは興味津々、どつちが勝つてもいいんだけれど、普段から乱暴で評判の悪い熊夫が負けると面白いなーと思つていました。でも新参者で、しかも田舎出身の日出男が勝つのは無理だろうなーとも思つていたのです。ところが実際に殴り合ひをしてみると、なんと日出男が勝つてしまつたのです。実はこのけんかには裏があつて、熊夫は前の日に食べたご飯が腐つていて食中毒になり、この日ははじめから体力がなかつたのです（ロシア革命前夜）。

しかし勝つた日出男はすっかり有頂天になつてしまつて、そんな裏事情など気にもか

けず、「オレはケンカの天才だ。どんな体のでかい奴と殴り合つたって、不思議パワーで最後には勝てるんだ」と思いこむようになります。そうなると、昔の純真さや真摯さは失われ、力を頼りに好き放題する乱暴な与太者にかわってしまったのです。がまんすることを忘れた日出男は、自分の気にくわないこと、思い通りにならないことがあると、すぐに暴力をふるうようになり、まわりの人たちから嫌われるようになつていきます。まわりの人たちは、説教したり嫌がらせしたりして（彼らだって善人ではありませんから）、日出男の乱暴を止めようとしますが、それががまんできない日出男はどうとう刃物を持って暴れ出します。みんなはそれを力ずくで押さえつけ、刃物を奪い、ばこぼこに殴りつけ、足腰立たないようにして放り出します（敗戦）。

これにこりた日出男は心を入れ替え（…）

が日出男の偉いところですね）、それからは暴力に頼らず、智慧の力だけで世間を渡つていくことにします。もともと勤勉で誠実な人柄だったのですから、もとに戻つて眞面目に勉強するうちに、たちまち優等生になり、「乱暴者の日出男ちゃんもすっかり更生して立派になつたね」などと言われるようになります。こうしてつましい手仕事から再出発した日出男は、頭を使つて次第に商売の手を広げ、家電、IT、箱物に娯楽となんでも来いの一大チエーンを開拓し、皆も羨む大富豪になることができました（高度経済成長）。

ところが、あんまり儲かるものですから、またまた日出男の悪い癖、傲慢の虫が出てきて、「オレは商売の天才だ。他の奴らにはない不思議パワーがあつて、放つておいても金が降つてくるんだ」と思うようになります。こうして遊び心が湧いてきた日出男

は、地道に稼ぐよりも遊んで儲ける方法を選ぶようになり、人に稼がせて、そのうわまで生きていこうと考えるようになるのですが、最後には金を預けた相手に根こそぎ持ち逃げされ、あつという間に借金暮らしに転落してしまいます（バブル崩壊）。本来ならここで心を入れ替えて、昔のような実直な商売人に戻るところなのですが、なまじく貯金が残っていたため、実際には貯金と借金で差し引き大赤字なのに、まだ余裕があると思いこみ、いまだに遊び癖が抜けません（国債と郵便貯金）。一所懸命勉強して、そのおかげでやつとここまで来れたというのに、その苦労もすっかり忘れ、「勉強なんかしなくてたってなんとでもなるさ。なしにろオレは天才なんだから、のんびり空でも眺めていれば、パパッと閃いて世間をあつと言わせることなんぞ朝飯前。また昔の富

豪生活にだつて戻れるさ」などといつてごろごろするばかり。他の人たちが机に向かって勉強に精を出している間も、一向、勉強する気配はありません。とまあ、こういうわけで突然話は終わりますが、それは、このもうたら日出男が今の日本の現状だから、ここで終わらざるを得ないので。この話の中、日出男、つまり日本は、大きな失敗を二回犯しました。腕力に自信をもつて与太者になつたことと、頭のよさに自信をもつてぐうたらになつたことの二回です。一回目の失敗は、敗戦による日本滅亡という結果で終わりましたが、二回目の失敗の結果はまだでていません。おそらく将来、なんらかのかたちで日本に不幸をもたらすでしょう。そして、この二回目の失敗の原因こそが「ゆとり教育」という名の世紀の愚行です。お釈迦様以来、修行こそが仏教僧侶の唯一

の目的でした。修行のためにはあらゆる日常生活を放棄し、すべての時間を注ぎ込まねばなりません。そうやって精一杯の努力をした結果として、僧侶は人として最高の安らぎを手に入れることができます。ここに手抜きや近道はありません。努力した人が、その努力に応じた結果を手に入れるという、まさにシンプルな流れがあるだけです。

でもしそこに、「ゆとり修行」というものがあるとしたら、それはどういったものになるでしょうか。今まで一日十二時間坐つていたのを、八時間でやめるとか、一日二十ページ読んでいたお経を十五ページにするといったことはどうですか。確かに時間が余つて楽ですね。でももちろん、それはその人が仏教者として堕落したことを意味します。どうしてもやらねばならないことを先延ばしにしているのですから、そのつけは必ず後で

まわってきます。こんなのは「ゆとり」じゃありませんね。ただの手抜きです。もし本当に「ゆとり修行」というのならそれは、厳しい修行生活が続けられるよう、まわりの環境を整え、万全のサポート体制を敷くこと、修行者が余計なストレスを感じることなく存分に厳しい修行に専念できる場を用意することでしょう。こうすれば修行者は、他のくだらないことに気をつかわず、「ゆとりをもつて」修行に励むことができるはずです。これが本当のゆとりというものでしょう。

実はお釈迦様は、そのことを十分ご存じでした。そして、修行者ができるだけ快適に、無駄に時間を浪費することなく修行できるよう考案してくださったのが、他ならぬ僧団(サンガ)という共同体組織なのです。サンガの中では、病気になつた時の相互扶助体制や、雑役の当番制、儀礼の簡便化、托

鉢の省エネ化など、修行をサポートするための様々な合理的システムが完備されており、僧侶は可能な限り最大の時間を修行に使うことができるようになっています(これらは皆、律の中で明記されています)。お釈迦さまは「ゆとり」ということの本当の意味をちゃんと分かつておられたのです。やらねばならないことは絶対にやる。そのためにはあらゆる無駄を省いて全力投球の体制をつくる、それが「ゆとり修行」です。

週に六日間、机に向かっていた子供に、「五日でいいよ。あとは自分の好きなことおやり」と言い、誰もが知つていてあたりまえのことを「そんなこと覚えなくともいいよ。その分、自分の好きなことおやり」と言つて放り出す、それを「ゆとり教育」と言うのなら、ゆとり国家日本の行く末も思いやられます。仏教はなにを置いても努力の宗教、

「人の価値は努力で決まる」と宣言した宗教です。中でも禅宗は努力の価値を重視します。そういう意味では、禅宗の人たちこそ、「ゆとり教育」の愚かさが一番理解できるのかもしれませんね。

ぐうたら日出男君も、そろそろ目を覚まして、勤勉で実直な清々しい好男子に戻る時期でしよう。モラルの低下した日本で、なにを手本にして更生したらいいのか皆が迷っている時、「ほら、こんな近くに、何百年も前から立派な生活を守ってきた人たちがいるじゃないの」なんて言われたら、どうですか、うれしいことじやありませんか。今の仏教には、そんな重大な役目があります。心して暮らしていくなければなりませんね。(私は生まれつきのぐうたらで、もう更生は無理なので、毎日やけ酒を飲んで暮らすことにします。悪しからず)

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（七）

盗人百態

佐々木 閑

このコラムでは、仏教の律を中心にしていろいろな珍しい話を紹介しています。あんまり役には立たないでしようが、仏教というものが聖も俗も含み込んだ、おそらく広大な世界だということは分かつてもらえるのではないかと思っています。しかし

の姿を皆さんにお伝えすることができません。皆さんはきっと「律にいろんな面白い話が入っていることは分かるけれど、その律というものは全体としてどんなものなんだろう」と疑問に思つておられるのではないでしようか。そこで今回は、そういういた疑問に少しだけ答えられるようにしたいと思っています。

かも一話完結で連載を続けようとすると、つい狭い領域の一テーマだけをとりあげることになってしまって、律という資料全体

からできています。前半は、「お坊さんはな

になにしてはならない。この規則を破つた者には「これこれの罰を与える」といった具合に、出家者の禁止事項を並べたもの。それは全体で約二百五十条あります（女性の場合三百以上）。後半は、日々の僧団生活で行われる活動や行事のやり方を決める部分。つまり僧団生活のマニュアルです。たとえば、お坊さんどうしがけんかになつたら、どうやって和解させるか、といったことが決められていています。でも律の内容がこれだけだつたら、たいした量にはならないと思われるかもしれませんね。禁止事項二百五十条といつたところで、ならべてみればわずか数ページにしかなりませんし、活動マニュアルだって、基本的な部分だけならわずかなものです。しかし実際の量は、その何十倍もあります。その理由は、ひとつひとつのかなりに對して、それが制定されること

になつた因縁や、それを破つた悪い坊さんの具体例など、いろいろな付加説明がくついてくることがあります。譬えていうなら、法律の条文を集めた六法全書だけなら、たいした量ではありませんが、それに基づく今までの犯罪例をすべて集めたら山のようになる量になるのと同じです。そして、律の面白い話は、そういういた犯罪の具体例の中に一杯入つていています。

律は仏教世界の法律ですから、とても杓子定規で厳密なもののです。本当に、一見したところではバカバカしく思えるほど杓子定規なのです。しかし、法律というものは本来そういうものでしよう。あいまいな定義や、いいかげんな基準だったら世の中無茶苦茶になつてしまします。ですから、仏教の律がバカバカしいくらいに杓子定規であるということは、仏教という宗教がとても見事な

法律体系を持っていたということを意味しますし、それは、それほど厳密な法律を必要

とするほど、仏教は出家世界の円滑な運営を重要視していたということなのです。抽象的な話ばかりでは何も伝わりませんから、具体的な例をだして、律の見事な杓子定規さをご披露しましょう。今回は泥棒の話です。

律では、重大犯罪のひとつに窃盜をあげています。比丘や比丘尼が人の物を盗んだら、波羅夷はらいと呼ばれる、とても重い罪となり、僧團から永久追放になるのです。条文だけでいえば「盜むな。盜んだら波羅夷である」と、まことに単純なかたちになるのですが、これだけでは法律とはいません。「盗むとは、どういう行為を指すのか」がはつきり決まっていなければ、規則を適用することができないからです。では、律にてく

る、盜むという行為の数々をご紹介します。

「地中物」…金目の物が入った壺などが地中に埋められているのを知つて、それを盗む場合。鋤など、掘るための道具を用意した時点では軽犯罪です。軽犯罪とは反省しただけで許される最も軽い罪のこと。地面を掘つても軽犯罪。ですから、鋤を用意して地面を掘つたら、軽犯罪を二回犯したことになります。地面の中の壺に触つたり搖らしたりしたら未遂罪。未遂罪だと、僧團追放にはならないけれど、それより一ランク軽い罰が与えられます。そして、その壺をもとの場所から移動させた時点で、本当の窃盜罪になります。では、壺そのものは動かさず、どんぶりを壺の中にいれて、それで中のお金をすくいとるのはどうでしようか。どんぶりがお金に触つたら軽犯罪、そのあとどんぶりを動かしたら未遂罪、完全にすくい

取つた時点で窃盗罪です。中にあるのがお金ではなく、ネックレスのような紐状のもので、それを手で壺から引つ張り上げて取ろうとした場合はどうなりますか。手でネックレスに触れば軽犯罪、動かしたら未遂罪、そしてそのネックレスの下の端が、壺の口からほんの少しでも外に出たら、その時点ですで窃盗です。では壺の中に、カルピスみたいな美味しい飲み物が入つていて、それをストローで吸いあげて飲む場合はどうですか（カルピスというのは、インドの高級乳製品カルピスにちなんでつけられた名前です。ご存じでした？）。ストローで飲む場合、カルピスが、ストローの中を上に昇つている間はまだオーケー。未遂罪ですみます。なぜなら、吸うのをやめればカルピスは再び壺に戻つていくからです。ストローを通つたカルピスが口の中まで入つてきた段階でもま

だ大丈夫。逆にストローを吹けば、口の中のカルピスを壺に戻すことができるからです（汚いなー）。でも、口の中のカルピスをゴッケンと飲み下したら、もう戻すことはできませんから、その時点ですで窃盗となるのです。どうです、疲れましたか。地中の壺の中の物を盗むだけでも、これだけの場合分けが必要なのです。そして、このような分類が「地中物」以外にまだ三十以上あります。私などは、そういう細かさが大好きで、読みながら思わず笑ってしまうのです。全部紹介できないのが残念なのですが、面白い例をもう少しご紹介しましょ。

「税物」脱税も立派な泥棒です。お坊さんはまだオーケー。未遂罪ですみます。なぜなら、吸うのをやめればカルピスは再び壺に戻つていくからです。ストローを通つたカルピスが口の中まで入つてきた段階でもま

こを通るためには通行税を払わねばなりません。インドにももちろんそういう関所が各地にあって、通行人は単なる通行料だけではなく、持ち込む物品がある程度以上の価値の場合、相応の物品税を払わねばならなかつたのです。空港で、私のような貧乏人ならば税関もフリー・パスですが、高いおみやげや多量の商品を持ち込む人はそれに応じた税金を払わねばならない、それと同じです。お坊さんは原則として個人財産を持つていませんから、まず間違いなくフリー・パスです。しかし場合によつては、価値のある物を人から布施してもらつて、それを持つたまま関所を通るというようなこともあります。その場合は、出家だからといって免除されることはなく、物品には税がかかられます。お坊さんはお金を手持できませんから、おそらくその場合は物納になるんで

しょう。ところが、これを嫌がつて、衣の下や鉢の中などに品物を隠して関所を通ろうとするお坊さんがいたらしいのです。払うべき税を払わないのですから、これは国家からお金を探んだことになります。そこで律では、そのような脱税行為も窃盗であるといいます。もちろん波羅夷です。もう少し詳しくいうと、課税品を隠そそうと思つて、それに触つたら軽犯罪、動かしたら未遂罪、隠したまま税関の門を通りすぎて一步踏み出したら未遂罪、そして二歩進んだら窃盗罪が成立します。また、関所の中から品物だけを先に門の向こうへ放り投げておいて、関所を通過してからそれを拾うというかたちの脱税も考えられますが、その場合は、品物を関所の向こうへ放り投げた段階で窃盗となります。悪賢い人がいて、一緒に旅をしているお坊さんに「あのー、実は私、かなり金

目の物を持つておりまして、持つたまま関所を通ると随分と税金をとられてしまいます。そこでご相談ですが、関所を通る間だけ、その品物を持っていてもらえないでしようか。お坊さまなら、関所の役人もフリーパスで通してくれますでしよう。無事関所を通ることができましたら、相応のお布施はさせていただく所存でござります。いかがでございましょうか」などともちかけます。それを承諾して、他人の脱税に協力した場合も、その坊さんは窃盗罪になります。脱税で利益を得たのですから当然ですね。

三十種類全部ご紹介できたらしいのですが、そんなページ数も根気もありません。このあたりにしておきましょう。今ご紹介したのは律の中の、窃盗に関するきまりですが、長い仏教の歴史の中で、その律に対しても

後の時代の人が次々に注釈をつけていきます。その注釈には、律の中では言い尽くせなかつた、もつともつと細かい事例が一杯でできます。こうやつて仏教の法律体系は、ますみがき抜かれ、細分化されていったのです。神は細部に宿るといいます。誰でもが一瞬で分かる大雑把な謳い文句だけが仏教の真髄ではありません。まさに重箱の隅をつつきながら、少しづつ少しづつ前進を続けた律の世界もまた、正真正銘の仏教世界なのです。

(窃盗に関する規則の出典については、佐々木閑「Samantapāśādikā と律藏」『仏教研究』第二十九号、二〇〇〇年、六九～八九頁を見てください)

〔花園大学教授〕

# 戒律のはなし（八）

仏教の未来

佐々木 閑

二年間にわたってコラムを連載してきましたが、あんまりだらだら続けても意味がないし、読者の皆さんも律の話にはうんざりしてきました頃でしようから、このへんで締めにしたいと思います。最後ですから私自身の仏教に対する思いを少しだけご披露します。私は仏教が大好きで、特にお釈迦様がおつくりになつた最初期の仏教僧団のかたちに惚れ込んでいます。そこにあるのは世界にも類のない、とても合理的で、しかも気配りの行き届いた宗教システムです。このコラムで何度も言つてきたように、仏教の究極の目的は、坐禅を中心とした仏道修行を徹底的に行うことがあります。とにかくできるだけ多くの時間とエネルギーを修行に使うという、その一事が重要なのです。托鉢するのも、粗末な袈裟で暮らすのも、男女がそれぞれ別れて集団生活を送るのも、およそ、仏教の生活スタイルというものはすべて、ひたすら修行を完遂するために設計され、構築されているので

す。そういうた仏教生活の細部を知るために  
は、お經や哲学書は全く役に立ちません。お  
經とか哲学書というものは、仏教の「精神」を  
語るものですから、頭で仏教を理解しようと  
する人には役に立ちますが、仏教の世界で実  
際に生きていくための方法については何も  
教えてくれません。それはお坊さんたちの生  
活マニュアルである、律にしか書いてないの  
です。ですから、仏教という宗教の運営シス  
テムを知り、「我々は仏教者としてどう生活  
すべきか」を理解するためには、律を学ぶし  
か方法がないのです。

日本の仏教は、様々な歴史的制約のせいで  
律を正しく取り入れることができなかつた  
ため、「僧団のない仏教」という、きわめて特殊  
な形態になつてしましました。皆さんのが「僧  
団だ」と思つてゐるものは実は「教団」、つまり  
信者の集団であつて、律にしたがつて生活す

る純粹な出家者の集団」というものは日本に  
はないのです(ただ禅宗の僧堂だけが、それに一  
番近い形を残しています)。ですから私たち日本  
の佛教者が律に触れる機会はほとんどない  
のですが、一方、スリランカや東南アジア、あ  
るいは韓国や台湾のお坊さんたちは皆、律に  
したがつた本来の僧団生活を送っています。  
ここに、日本の佛教と、それ以外の国々の仏  
教との間の決定的な壁ができてしまいます。  
この壁を乗り越えて、すべての佛教者がひと  
つの宗教のメンバーであるという自覚を持  
つたためには、我々自身がよく律を学び、自分  
たちに欠けている点や、あるいは逆に自分た  
ちの方がすぐれている点をしつかり認識し  
たうえで、対話していかねばならないのです  
(これについては『戒律文化』創刊号、三一一七ペー  
ジで詳しく述べましたのでご参照ください)。

以前、私自身が直接聞いた話ですが、ある

仏教の親睦団体が募金でお金を集めて、それでスリランカに保育園を造ったそうです。貧しいスリランカの村に立派な保育園の建物が建ち、地元の人たちはたいそう喜んだということがあります。いい話ですよね。ところがその団体の人たちは、日本から阿弥陀様の仏像を持つていて、その保育園の真ん中に安置し、通つてくるスリランカの幼子たちに教えて、毎日その阿弥陀様に手を合わせ「南無阿弥陀仏」と唱えさせているのです。これはいい話ですか？私は恐ろしい話だと思いました。その団体の人たちは、この話を嬉しそうに語つておられましたが、私が「スリランカの上座仏教と、日本の浄土系仏教は本質的に異なる宗教だから、金にものを言わせて、自分たちの教義を、しかも理屈の分からぬ若い子供達に押しつけるのはよくない」と言うと、大変驚いた様子で、「でも大乗も小乗も、仏の慈悲ばかりです。では一体どこに間違いがある

悲の眼から見れば結局は同じ世界だと聞きました。ですから小乗の人たちだつて、お念佛を唱えれば極楽に行けるんじやありませんか」とおっしゃつておられました。「大乗も小乗も元は同じだ」という主張が、小乗仏教を取り込んでいこうという大乗側の勝手な戦略だという、一番大事な点を学んでいないならば地獄行きが決まつているお前達を、神の愛によつて救つてやろうというのだ。感謝せよ」と言いながら、アジアやアフリカに布教し、植民地政策の土台をつくつていったキリスト教宣教師たちの姿とダブります。

親睦団体の人たちが、なにか悪い心を持つてゐるとか、下心があるなんて思いません。皆さん、優しくて、人のためになにかしてあげたという気持ちで一杯の、尊敬すべき人た

のでしよう。答えはひとつ。仏教を日本とい  
う狭い世界の中だけで理解して、それで世界  
中のすべての仏教が分かつたと早合点して  
いるところに問題があるのです。責任の一端  
は、そういう考え方を信者さんたちに広めて  
いる、日本の仏教各派にもあります。狭い日  
本でしか通用しない特殊な考え方を、まるでそ  
れが世界中どこへだしても理解してもらえ  
る最高の教えであるかのように思い上がつ  
て無理強いし、結局それがまわりの国の人た  
ちに大きな害を与えることになる、というこ  
の構図は、戦前の大東亜共栄圏構想と同じも  
のです。今は、昔のように、他の宗教を押しの  
けて、ひたすら信者数を拡大すればそれでよ  
い、という時代ではありません。ひとりひと  
りの人間に人権があるように、ひとつひとつ  
の文化には文化の権利というものがあります。  
それを皆が自覚する時代になっているの

です。相手の文化に敬意を払い、それを尊重  
しつつ、「日本にはこういう考え方もあるので  
すがどう思われますか」と穏やかに自分たち  
の考えを提示し、それでそれが受け入れられ  
ていくのであるなら結構なことだと思いま  
す。ともかく大切なのは学ぶことです。自分  
が修行して、自分が悟りをひらくのなら学問  
はさほど必要ではありませんが、それを人に  
教えていくというのなら、少なくとも、世  
界にはいろいろな考え方の仏教が存在するこ  
とや、それらの教義が根本的にはどういうも  
のであるかといった事柄を正しく教えられ  
るくらいの勉強は必要でしょう。仏教のこと  
を知らないお坊さんは、魚の捕り方  
を知らない漁師さんと同じで、笑い  
話にもなりません。これを読んでおられる皆  
さんにお願いします。どうぞ、仏教のことを  
一杯勉強して、そのクールでスマートな本当

の姿を、世の大勢の人たちに紹介してあげてください。仏教の未来が開けるとすれば、それは儀式の収入で生き延びる葬式仏教ばかりでなく（もちろんそれはそれで意味があるのですが）、お釈迦様の時代のように、若い人たちが我先に参入してくる、格好いい集団としての仏教が復活した時でしょう。そして、その格好良さを考えるための、絶対欠かせない虎の巻が、律なのです。ですから、日本仏教とは直接の縁がなくても、それを学ぶことはとても大切なことなのです。

二年間、律のことばかり書いてきて「花大の佐々木というのは完全な律オタクだ」と思われていることでしょう。まあ、半分は当たりです。でも私は律の他にも、アビダルマと呼ばれる仏教の一大哲学体系も研究していましたし、仏教と自然科学の関係についていろいろ考えています（ただし、この分野には怪

しいインチキ学者も沢山いるので困っているのですが）。そういう別の分野についても機会があつたらご紹介していきましょう。ただ、律とアビダルマと自然科学と、三つのうちのどれを優先するか、と問われたなら、今の日本仏教が直面しているいろんな問題を考えた時、どうしても律から語らねばならないと思つたのです。おふざけ半分のコラムですが、実は私はとても真面目なんです（こういうこと言うのが不真面目だつちゅーの）。連載中、いろんな人から激励やお誉めの言葉をいただきました。お叱りの言葉もあつたかもしれません、健忘症なもので、そういうのはすべて忘れました。ともかく多くの人が私の愚見を読んでくださつているということを知り、本当にうれしく思いました。また、機会があつたらご縁を結びましょ。ありがとうございました。

〔花園大学教授〕